

著：木村 琢磨

《ジェネラリスト BOOKS》高齢者診療の極意

書評者：江口幸士郎(今立内科クリニック)

よい本に出会いました。愛と敬意にあふれた、高齢者診療の手引きです。私が研修医の頃は、日本人の著者でこういった内容を書いた本はなかったと思います。この時代、この本と若いうちから出会える医師たちが本当に羨ましいです。

高齢者診療は、全ての研修医が迷い込む深い森です。医師の卵たちは、医学部の6年間で「診断」「治療」を必死に学んでから現場に出ます。さまざまなガイドラインを武器とし、大学病院で先輩たちが颯爽と患者の診断、治療をしているのを見ながら、自らが現場に立つその日を夢みます。しかし、やんぬるかな。大学病院ではあんなにも切れ味抜群だった方法が、高齢者、特にこの本に記載されている「臨床的高齢者」を前にすると、なぜだか切れ味が落ちてしまうのです。

高齢者は問診を取るのも大変だし、出てくる症状や所見も非特異的なものだらけ。検査をしようにも「先生、もう検査はいいです」とか言い出し、実際、検査に体力が耐えられるのか心配な人もいます。さらに言えば、診断がついて治療を行っても目に見えて元気になるわけではない、かえって弱っていつているように見える、そんな人たちもたくさんいます。

今まで学んできた方法が役に立たない。少なくとも、役に立って

いる実感がない。これは、研修医の心に重くのしかかります。なかには、高齢者診療自体を苦手にして逃げがちになったり、「高齢者だから」というラベリングで、一様にちょっと腰の引けた診療を行ったりしてしまう研修医も出てくるかもしれません。

この本は、そんな暗い森を歩く、これからの若者たちへの愛にあふれています。研修医が戸惑いがちな状況をピックアップし、現場ですぐに役立つアドバイスが、エビデンスとともにちりばめられています。文章も対話式で読みやすく、1項目ずつが短いので、忙しい臨床の中でも、気になるところをさっと読んで現場に臨むことができます。どの項も素晴らしいですが、個人的に感動したのは、参ノ二「在宅医療で何をみるか考えよう!」、肆ノ一「高齢者には全体の舵取りを担う主治医を持つことを勧めよう!」で、高齢者の生活と人生を守るために必要な視点が描かれています。この2つも含め、通読すれば、高齢者診療に必要なエッセンスを一通り把握することができそうです。そして、暗い森で迷わないための地図として、灯りとして、研修医を導いてくれるはずです。「高齢者診療は、楽しい」。そう思えること間違いなしです。

もちろん、研修を終えた医師や、すでにベテランの域に達して

いる医師たちにもお薦めです。巻中のコラムに、「若い頃に観た映画をあらためて観た話」が出てきます。名画が名画たるゆえんは、繰り返しの鑑賞に耐えるだけでなく、観る度にまた新たな感動を与えてくれるところです。そしてこの本も、そのような作品の1つに列するのでしょうか。若い時は、見えない道を照らす灯りとして、経験を経てからは、深い森を悩みながら歩いてきた戦友の、共感できる話として、何度も、新たな味わいを感じられるはずです。

最後に、この本にあふれる敬意について。登場する高齢者は「診察の対象」というよりも「人生のある高齢者」として描かれ、最大限の敬意が表されています。私はいくつかの仕事を著者と言う機会に恵まれましたが、その際、彼の鋭い頭脳とともに印象に残ったのは、穏やかで丁寧な、彼の口調、声でした。この本からは、確かに、その声が聞こえます。この穏やかな声、つまり他者への敬意こそが、紹介されているさまざまな極意の基盤なのだと気付くことができました。

● A5・頁296 2022年10月
定価：4,400円
(本体4,000円+税10%)
[ISBN978-4-260-05027-2]
医学書院刊